

ねりまの文化財

文化財講座抄録

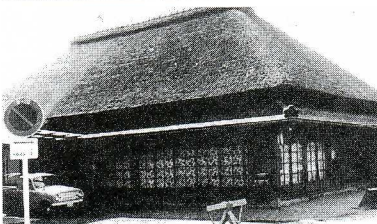
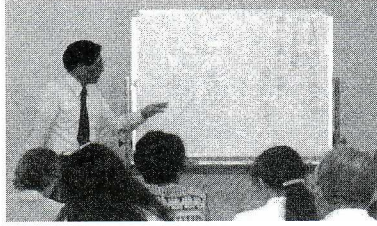
日本の古建築 — 東京の民家 —

工学院大学教授 山崎弘先生

（六月二七日開催した文化財講座の内容を文化財係の責任で抄録したものです。）

今回は、日本の古建築のうち、民家について話を進める。

まず、民家の屋根の形式は、屋根材に影響され決まる。農家のように屋根材に茅・藁など草を利用した場合、屋根型は寄棟になり、町家のように板・瓦を利用した場合は切妻に



（下）相原家旧住宅全景（昭和39年小林昌人氏撮影）

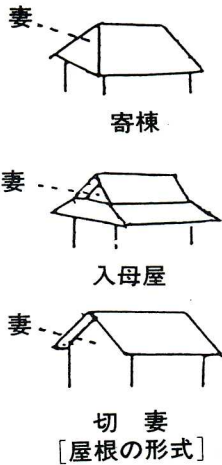
なる。後者を寄棟にしないのは、板・瓦では妻の部分を三角にするのが技術的に難しかったのである。また、板・瓦葺屋根の場合、勾配を急にすると板・瓦がずれてしまうので、草葺屋根とくらべ、傾斜は緩やかになる。しかし、寄棟・切妻と一様に言っても、全部が全部同じ形ではない。屋根型は、気候・風土・生業・歴史的な条件や土地の材料をいかに使うかという創意工夫に結びついて、地方的な特色が生まれるのである。そして「造り」と称する民家のいろいろな分類がなされるようになる。曲屋・中門造り・兜造り・合掌造り・大和造り・本棟造り・クド造り・ジョウ口造りといった様式である。

会 員 課
社 会 教 育 係
（ 文 化 財 係 ）
☎ 3993-1111 内線7141
〒176 練馬区豊玉北6-12-1

東京は、武蔵野の平野部、多摩の丘陵部、西南の山地、江戸川周辺の低湿地、島しょ部と、地形的・気候的に変化に富み、民家の様式も気候・風土・生業の違いによって地域性を示している。例えば、養蚕が盛んな山地・丘陵部は、通風性や採光を確保するため、小さい妻を持った入母屋の屋根が多い。山梨県の方で考えられた妻の部分の大きさを開放する兜造りという屋根型もみられる。平野部は、一般的に寄棟の屋根型が多く、練馬も同様であったと思われる。

また、八丈島の場合は、板の間の二部屋構成で、部屋の間は廊下、その四隅は物入れに入れておくためと、四隅を重しにして台風でとばされないための工夫である。

一方、すまいの間取りは、広間型二間取り型から機能の分化がみられ、幕末頃四間取り型になっていくのが主流である。上層階級の場合は、さらに接客部分が設けられ、六間取り型である。江戸川周辺では、曲屋がみられる。平野部でも家の後方にのびる曲屋がみられる。



これは、家族構成が増え、寝るところを増やしたためである。

このように、間取りの地域性はあまりなく、地域によって屋根型にいろいろな種類があるのが、東京の民家の特徴といえる。

練馬区内でみれば、ほとんど民家の地域性はない。昭和五八年の調査時、民家は三三棟あり、そのうち直屋ちやという長方形の民家は二七棟、家の後ろへ角を出した曲屋は六棟であった。屋根型でみると、寄棟二三棟、入母屋は七棟で、後者は養蚕農家が含まれる。間取りはすべて四間取りであったが、これは生活をjしていく上で改造を加えた結果であり、原型の詳細は不明である。年代的には、それほど古い民家はなかった。

最後に、古い民家、新しい民家を見分ける目安を紹介する。一つは柱間の間隔で、梁を支える柱が一間おきに立っている民家は古い。これに対し、柱の数が省略されて柱間の間隔が広く、大黒柱が太くて、差鴨居の太い梁が入っているのは、頑丈にできているが、それほど古い民家ではない。次に、柱の仕上げであるが、チョウナ仕上げ、とりわけハマグリ型のチョウナで造られた民家は古く、カンナ仕上げの方は新しい。これらの点などが、民家の新旧をはかる目安であり、知っていれば民家を視ることが興味深くなることであろう。

郷土資料室収蔵品シリーズ 第20回

茶摘み鉋ばさみと刈り込み鉋ばさみ

練馬区内の茶の栽培生産は、明治初期から中期にかけて急速に発展しました。大正十年ごろまでが最盛期でした。関東大震災を契機に都市化が進むにつれて衰えましたが、昭和三十年代までは、自家用茶を作る光景がみられました。茶摘みは、五月と七月に行なわれました。

ここに紹介するのは、茶を栽培するときに使う二つの鉋です。

写真1は、茶摘み鉋です。茶の葉を摘むための専用の鉋です。刈り取った茶の葉を上刃の受け板で右方へかき寄せ、下刃についている集葉袋に入れられるように工夫されています。受け板とは、上刃に垂直についている鉄

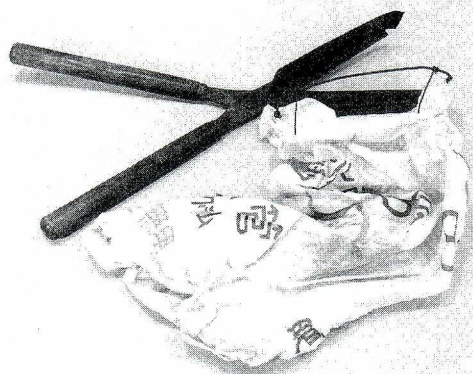


写真1 茶摘み鉋

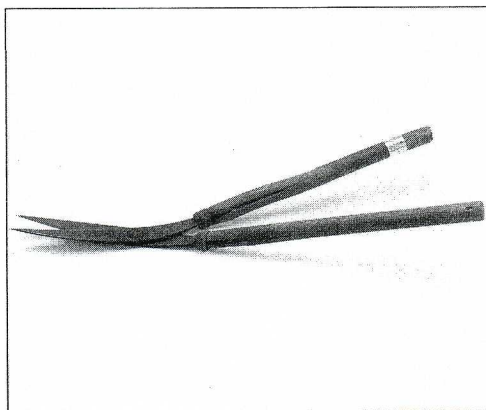


写真2 刈り込み鉋

板のことです。

茶摘み鉋は、静岡県で考案され、大正のころから実用化されました。

はじめは手摘みが行なわれていましたが、手間がかかるのでだんだんと鉋を使うことが多くなりました。しかし上質の茶は、手で摘みました。

写真2は、刈り込み鉋です。茶の木の刈り込みに使いました。刈り込みは、幼木を仕立てたり、樹形を整えたり、枝に勢いをつけるために行いました。

刈り込み鉋は、茶の木以外の木の剪定せいでいにも使用しました。

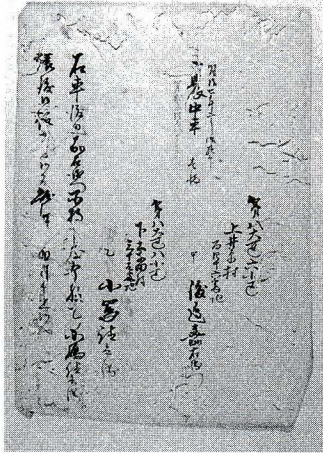
でき上がった茶は、区内の小売り商や仲買人に売り渡されました。

古文書の上手な保存の仕方① — 生物害対策 —

古文書から私たちは先人の営みを知ることができます。区内に残る古文書も貴重な文化財として後世へ伝えていきたいものです。

しかし、保存方法を工夫しないと古文書の劣化はどんどん進んでしまいます。左の写真を見て下さい。古文書の一部が破損し、字が読みづらくなっています。原因は、シバンムシという虫によって古文書が喰い荒らされたためです。しかも、この虫の糞や唾液が固まって古文書は開きにくくなってしまいます。

このように古文書に被害を与える生物は、虫・禽獣・カビがあげられます。害虫はシバンムシ・ゴキブリ・シミ・白蟻などで、右に述べた害を古文書にもたらします。禽獣害としては、鼠による喰害・糞害があります。カビは多湿が発生原因で、日本では五月中旬から九月までの時期が発生の要注意時期です。古文書のこうした生物害を防ぐため、博物館・文書館では、ガスを用いて燻蒸を行い、



古文書に付着している虫・カビを除去します。その後、防虫設備・温湿調整設備を持つ収蔵庫に古文書を保管し、再発を防ぎます。しかし、このような設備を持っている施設は限定されています。そこで個人のお宅でも簡単にできる古文書の保存方法について紹介してみよう。

まず、年二回ぐらい古文書の虫干し(曝涼)を行います。これは、古文書に含まれている湿気を拡散するため、殺カビ効果・殺虫効果がありません。古文書を直接日光に当てれば、より一層の効果が期待できますが、紫外線が紙質の変化をもたらすため、風通しの良い所での陰干しを薦めます。降雨の後や梅雨期は避けて実施して下さい。

虫干しを終えたら、古文書に付着しているチリ・ホコリをよく落とします。チリ・ホコリは虫のエサとなりやすいためです。その後、防虫剤をそえて古文書を収納箱にいれ、鼠のでないような場所に保管します。

防虫剤は市販のもので充分ですが、樟脳・ナフタリンは古文書を汚染するので、パラジクロルベンゼンがよいでしょう。薬剤は、上部から下部へ浸透していくので、収納箱に入れた古文書の上に中性紙を敷き、パラジクロルベンゼンをその上に置きます。収納箱は、密封性の高いもの(タッパーなど)を使用し

ます。薬剤は使用が多過ぎたり、複数のものを混用すると古文書を汚染するおそれがあるので注意して下さい。

防カビ対策としては、調湿紙を収納箱の中に敷き湿度を調整します。調湿紙が手に入らないときは、写真用品の乾燥剤で代替するのもよいでしょう。虫干しで殺カビした後、カビの発生要因である湿度を除去し、カビの再発を防ぎます。

こうして、古文書にとって「快適」な環境を作り上げれば、個人宅でもかなりの保存効果が期待できます。

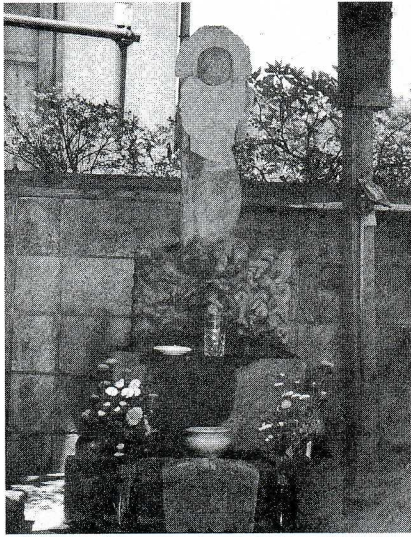
丸彫の庚申さま

文化財保護推進委員

長坂淳子

石神井川の南側の台地、その昔、下石神井村伊保ヶ谷戸とよばれた下石神井五―七の地に、享保二二年(一七二七)からずつと位置も変わらず、一本の石で青面金剛像を丸彫りした珍しい庚申塔が建っています。

庚申とは、エトの上の言葉で十支十二支を暦の年に当て、六〇年に一度、それを月日に当てて同じく六〇日に一度巡ってくる日です。私達の体内に三尸虫さんしちゅうという虫がいて、日頃の行状を監視しており、六〇日ごとに訪れる



庚申の夜、私達が寝ている間に体から抜け出し天帝に悪事を告げ、天帝は私達の寿命を縮めようとします。そこで庚申の夜は眠らないで謹慎しようという信仰から生まれたといわれているのが庚申信仰です。

江戸時代中頃から民間信仰として全国的に広がり、講が出来、庚申待が行なわれ、村の入口などに庚申塔がさかんに建てられました。練馬区内にも現在一三〇基余の庚申塔が残っています。文字だけのもの、石の中央に青面金剛像が彫られているもの等、庚申塔の形も様々です。

村の講の人々は、庚申の夜当番に当たった家を集まり、庚申の掛軸を拝み、灯明・線香等をあげ、食事をしながら情報交換をし合い雑談に花を咲かせて時をすごしたといわれています。

下石神井の丸彫像の台石には、講中三四人

とあります。およそ二七〇年の歳月がたった今、九人の講中の人たちと地域の人々によって守られています。青面金剛像は総高一四八センチで、天上へ報告に昇天しようとする三尸の虫をにらみつけるような憤怒の相をしています。その姿は美しく、ていねいに彫られ足下に邪鬼を備え、台座には三猿がみごとに浮彫りされています。

しかし、この像にも受難の時がありました。昭和四〇年頃、車にひっかけられ、像は中央で二つに折れてしまいました。車はそのまま走り去ってしまいましたが、近くに住んでいた、講の人たちと石塚勘七さんらが気がつき、すぐ直しました。当時のことを石塚さんは、「まったく、勿体ないことをしちゃったな、と思いつながら割れたところにコンクリートを入れ、その上につけて、くつつけた。ほんとうによくくつついた。」

と、述懐していらっしゃいました。

講の人たちは今、年に三回庚申待をしています。当番に当たった人は庚申様の掃除をし灯明をあげ、みんなで食事をします。地域の人々にも大切にされており、赤いよだれ掛けに赤い帽子、びんには季節の花がいつも供えられており、幸福そうな庚申さまです。

「お参りしているお陰で、大きな病気もしないで丈夫に働けてありがたい。寄り合った時には世間はなしをし、みんな身内みないなもんで。」
とは石塚さん。

「病の心配、自然災害、凶作と農民にとつて不幸な時代も数多くあったでしょうし、そんな時、神にすがり、農耕の安全を祈ったのじゃないかな。」

まだそんなこと（庚申待）しているっていわれちゃうんですよ。」

と、講元の本橋豊一さんは苦笑いしました。丸彫の庚申さまは、世の中のどんな風物・変化をみてきたのでしょうか。清潔で、静かに保たれている祠の中の一本の石に彫られた青面金剛・邪鬼・三猿のそのほ、えましい姿をみているうちに、いつの時代にも忘れてはならない人々の心のやさしさを感じました。尚、この庚申塔は平成七年三月、区の登録文化財になりました。

享保十二丁 未天

武芴豊嶋郡

下石神井村

奉待 庚申

願主 小川八兵衛

講中 三十四人

六月吉日

台石銘文